吉野川河口干潟の保護活動のためのリーフレット作成とシンポジウムの開催

とくしま自然観察の会

代表　井口　利枝子　　徳島県

吉野川の河口の魅力は、何といっても、海と見間違うほどの河口の景色の広大さと水量の豊かさ、14.5kmのところにある第十堰まで広がる汽水域の広さです。そして、シオマネキ、ハクセンシオマネキ、トビハゼ、タビラクチ、イセウキヤガラ等の貴重な生物が多数生息し、多様な生態系が保持されています。このような豊かな生物相と素晴らしい景観、吉野川の豊かな水辺は、人々に自然との触れ合いの場を提供しています。なかでも、河口干潟は、1996年３月のブリスベンにおける第６回ラムサール条約締約国会議において「東アジア・オーストラリア地域におけるシギ・チドリ類重要生息地ネットワーク」に日本で最初に登録された国際的にも重要な湿地です。渡り鳥たちの中継地となって160種を越える野鳥たちが集まり、15種類以上のカニたちが生息する、まさに、生きものたちの楽園なのです。

しかし、最近になって、吉野川河口域においては、２本の道路橋（東環状線渡河橋・四国横断自動車道渡河橋）、河口吐き出し口人工島埋め立て拡張計画（マリンピア沖州第２期事業）などたくさんの大型公共事業が計画され、河口生態系への影響が懸念されています。2000年１月23日に徳島市において実施された第十堰可動堰化計画に対する住民投票によって、全国的に吉野川の第十堰問題がクローズアップされてきましたが、その影で、河口干潟に係わる複数の開発計画は同時進行しており、これらの計画は、直接干潟を埋め立てて消滅させる事業とは少し異なっているように見えますが、干潟環境への悪影響はとても大きいものだと心配されています。

種の多様性、生態系の多様性を保全することは国際的な目標とされ、極めて豊かな生態系を保持することが知られている湿地や干潟の保全については、今や世界的にも非常に関心が高いものです。しかし、一方では、諫早湾干潟の水門締め切りによる干拓事業にはじまり、沖縄泡瀬干潟など大規模な干潟の消滅につながる事業が進行しており、日本国内の干潟は危機的な状況にあることがわかります。このような状況の中で、吉野川の河口干潟の保全は、極めて重要性が高いものとなっています。

私たち「とくしま自然観察の会」は、1994年に「この指止まれ」式で発足し、身近な自然の価値を見直し、伝えていくための自然観察会を徳島市内の城山や吉野川の河口干潟を中心にして、市内の様々な場所で定期的に開いています。また、吉野川の干潟のガイドブックやビデオを作ったり、干潟でコンサートを開いたりしながら、干潟を直接体験することによって、干潟のことをよく知り、親しむという活動を行ってきました。私たちは、自然保護は地域について考えることからはじまり、自然観察会をとおして地域について考える場づくりをしたい、そして、手づくりの自然観察会から地域の自然を守る活動へつなげたいと思ってきました。

吉野川の干潟からは、自然のつながりや人と自然との関わりやいろんなことがつながっていることを知ることができます。しかし、今、吉野川の干潟の自然は、全国的な傾向と同じように、もうギリギリの状態で、このままほおっておいたら自然のシステムが壊れるばかりの状態なのです。

本活動では干潟の保護につなげる活動として、次のような目標を掲げました。

吉野川河口干潟の価値や、開発問題など干潟を取り巻く現状を市民にわかりやすい形で、市民が共有できる情報として、干潟の魅力や価値を伝えるためのリーフレットを作成すると共に、専門家によるシンポジウムを開いて、吉野川の干潟の保護活動に関心をもつ人々とのネットワークを構築していくというものです。

1. 干潟の保護活動のためのリーフレットの作成

吉野川河口干潟は、市街中心部から車でわずか10分程度のところにありながら、「レッドデータブック（環境庁編）」掲載種のシオマネキ、ハクセンシオマネキやルイスハンミョウなど希少種の生息をはじめとして多様な価値を持っています。

「大都市を横断する大河川の河口に干潟とヨシ原がこんなに豊富に見られるところは、今やここ吉野川をおいてほかにはないのでないでしょうか。シオマネキ、ウモレベンケイガニ、ヒロクチカノコ、カワアイガイ、ハマグリ・・・・・。日本各地の干潟から姿を消しつつある動物がここには豊富にいます。こんなに身近に干潟の自然にふれられる特権をフルに活かしてください。」私たち市民による吉野川河口干潟の調査活動に長い間助言をいただいてきた奈良女子大学和田恵次教授からの吉野川干潟に対する応援メッセージです。地元に住む人は、吉野川河口干潟はあまりに身近にありすぎて、その価値や当たり前の凄さというものになかなか気がつかないのかもしれません。

私たちはこの河口干潟の保護とは、一部の専門家や活動家だけではなく、広く市民がこの干潟への関心を高め、本質的な価値に気づき理解することが何よりも重要であると考えてきました。そして、市民意識の高揚によって、持続的で共生的な吉野川干潟の環境の保護が実現できると思っています。

私たちは、人々に吉野川の河口干潟に対して関心や理解を深めてもらうために、年間を通じて、自然観察会を開催してきました。特に、春から秋まで干潟の生きものたちが活き活きと活動する季節に開く定例の吉野川干潟かんさつでは、子どもたちからお年寄りまで、毎回、たくさんの人が集まり、さらに、小学校の環境教育の授業や、保育所や学校のPTAなどが主催する干潟の観察会も積極的に応援しています。その結果、吉野川の干潟のファンもだんだんと増えてきたと思います。

さらに、ひとりでも多くの人に実際に吉野川干潟に足を運んでもらいたい、風を感じてもらいたい、そして、吉野川の干潟という「とびっきり素敵な場所」を、人と自然との関わりを感じる原点のような場所としてそんな思いをもつ人々と干潟との様々なつきあいの輪を広げていきたい、そのために、人と吉野川の干潟をつなぐための媒体になるようなリーフレットを作ろうと考えたのです。今まで私たちが干潟での自然観察会や調査などで得られた干潟の自然の様子や、干潟の魅力、人々の日常生活の中での干潟との様々な関わりあい、干潟周辺の開発計画など、できるだけ市民にわかりやすい形で広く伝える工夫をしました。

このリーフレットは人々の手元に残るため、それをコア（核）にするコミュニケーションやネットワークづくりが進むことが期待できます。未来の社会を支える子どもたちが原体験として吉野川やそこに生きるシオマネキや干潟の生きものに触れることは、自然保護の将来にとってその芽を育む活動になり、そのためにこの１枚のリーフレットは種をまいていってくれるかもしれません。

2. 専門家を交えたシンポジウムの開催

2001年２月３日には、吉野川河口干潟と沖州海岸の豊かな自然の保全を考え、未来に伝えるためのシンポジウムというサブタイトルをつけて、シンポジウム「未来につたえる干潟と渚」を開催し

ました。日本野鳥の会徳島県支部や本会を中心にした市民グループが「吉野川河口・沖州海岸シンポジウム実行委員会」をつくり共催で開きました。講師として、河野昭一京都大学名誉教授と、清野聡子東京大学大学院総合文化研究科助手をお招きして、湿地や干潟や沿岸域の環境保全をテーマにして、科学的な観点から、人々の興味や関心を深め、身近な自然環境としての吉野川河口干潟の保全の意味を多くの人々に問いかけようというものです。はじめ、一般の人には、少々難解すぎるテーマかもしれないと心配していましたが、このシンポジウムの開催日は、吉野川問題に関しても、また様々な面でも市民の関心が高かった徳島市長選の投票日の前日であったのも関わらず、予想を越えて150人以上の聴衆が集まり、たいへん意義深いシンポジウムであったと思っています。清野先生には、その後、吉野川河口干潟や沿岸域の環境変化についての調査やデータ解析などについて、現地調査をしながら、助言をいただき、継続してご支援いただいています。

3. 今後の展望と課題

『吉野川河口の干潟は、四国のまんなかの森から、ニンゲンの暮らす町をとおり多様な暮らしを支え198kmの道のりを、ゆっくりと流れてきた吉野川が海にであうところ。ここには、いろんな生きものたちがいっぱいいます。そして、泥や生きものたちが、せっせと海や川をそうじしているだいじな場所です。それから、海や川で暮らす生きものたちが、卵を産んだり、子ども時代を過ごしたりするゆりかごみたいなところなのです。そして河口の泥干潟は、川と海と陸地の三つの個性がまざりあってできた、とびっきりの空間。足元から無限の生命のエネルギーが湧いてきてワクワクした気持ちになります。

吉野川の干潟のことをゆっくりゆっくり見守りたい。

こんな、とびっきりの場所はみんなのもの。次の世代にも残したい。』

吉野川の干潟や、私たちを取り巻く自然環境はどんどんと変わっていくものなのかもしれません。しかし、いつの時代にも自然は私たちが生きることすべてと深いかかわりを持つということをこの1枚のリーフレットの中でメッセージとして託したいと思います。

これからも、ひとりひとりの顔がみえる形で、地域に根ざした活動を続けていきたいと思っています。

■とくしま自然観察の会
〒770-0944
徳島市南昭和町4丁目70- 3 -301　井口利枝子方
tel・fax　088-623-6783
e-mail　とくしま自然観察の会
office@shiomaneki.net
ホームページ　http://www.shiomaneki.net/

徳島で自然観察会
家族連れら150人参加

吉野川の干潟に親しもうと、自然観察会「しおまねきラリー」（とくしま自然観察の会など主催）が、徳島市の吉野川河口干潟で、家族連れら約百五十人が参加して開かれた。

長崎県の諫早湾の水門が閉め切られた一九九七年四月十四日を「干潟を守る日」とし、干潟保護を呼びかけて毎年行われているイベントの一環。

今回は、干潟のカニの群生地を中心に五地点にチェックポイントを設け、同会のメンバーが、カニの生態や干潟に関連した問題を出題。「シオマネキの名前の由来は」「ラムサール条約とは」などのクイズに、参加した親子らが一緒に答えていた。

また、干潟にできた小さな穴から顔をのぞかせるハクセンシオマネキやコメツキガニなど数種類のカニの様子を双眼鏡で観察し、写真撮影していた。

親子四人で参加していた同市城東町、会社員荒木良太さん(34)は「子供たちに自然を触れさせたくて来た。こんなに素晴らしい自然に囲まれているのだから、子供たちはもっと自然に親しんでほしい」と話していた。

干潟の生物を観察する参加者ら（吉野川河口近くで）

読売新聞　2000. 5. 17

「吉野川ひがた探検隊」募る

とくしま自然観察の会（井口利枝子世話人）は、小中学生を対象とした「吉野川ひがた探検隊」のメンバーを募集している。子供たちに自主的に自然に接してもらおうと企画したもの。また、探検隊の活動をサポートする高校生以上のボランティアも募集する。

小中学生を対象
とくしま自然観察の会

活動期間は来年三月までで①吉野川河口干潟の自然観察（六―十一月中に数回）②シオマネキの分布調査（夏休み中）③河口付近の住宅観察（期間中一回）―などを予定している。小学三年生までは保護者の同伴が必要。参加費は年間三百円。

問い合わせ、申し込みは同会〈電088（624）6325〉へ。

自然観察の会に助成金50万円

自然環境を保全する活動や研究に助成金を贈る「公益信託ＴａＫａＲａハーモニストファンド」の2000年度の助成先に、徳島県から「とくしま自然観察の会」（井口利枝子代表世話人、110人）が選ばれた。

助成金は50万円。同会では助成金を活用し、吉野川河口干潟の情報を分かりやすく紹介するチラシを作ったり、干潟に関するシンポジウムを開いたりする考え。

同ファンドは、宝酒造からの拠出基金を元に1985年に設立され、運用益で毎年、助成活動を続けている。今回は全国で11団体・個人が選ばれた。

徳島新聞　2000. 6. 18

中州の広さや生態系を実感

吉野川河口干潟で「環境調査&たんけん会」

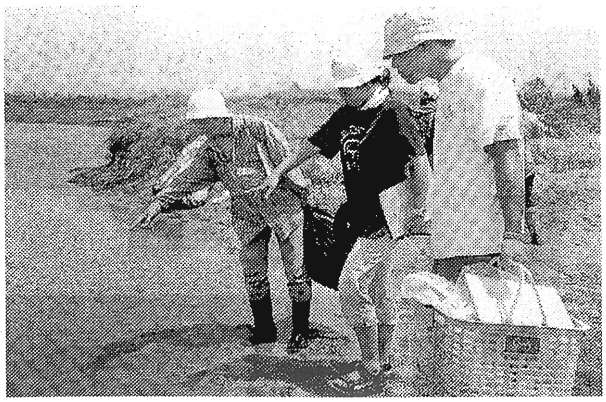
貴重な自然が残る吉野川河口の中州干潟で29日「環境調査&たんけん会」が開かれ、動植物や中州の環境変化などの観察や調査を行った。

「とくしま自然観察の会」が開いたもので、夏に行ったのは2年ぶり。一般の参加者も含め、11人が小舟で面積約80平方㍍の中州に渡り、時折強い風と小雨が吹きつける中、約2時間半探索した。

中州では環境庁の「レッドデータブック」で希少種に登録されているシオマネキやハクセンシオマネキをはじめ、貝や昆虫、アシなどの動植物を観察、採取したり、分布状況を調査。参加者は岸からでは分からない中州の広さや生態系を実感していた。

同会世話人の井口利枝子さん(47)は「砂のたい積が増える半面、泥の湿地が減るなど、一昨年に比べかなり変化しており、中州はたえず動いていることを実感した」と話していた。

【江見　洋】



中州干潟で湿地のシオマネキを観察する参加者＝徳島市の吉野川河口で

毎日新聞　2000.7.30

吉野川河口干潟 中州の生き物調査

とくしま自然観察の会

普段訪れることのない吉野川河口の中州干潟で生き物の生息状況を調べようと、「とくしま自然観察の会」（井口利枝子世話人）のメンバーや一般参加者ら十数人が二十九日、地元漁師の舟で中州に上陸、砂地や芦原の様子を観察した。

同会が夏場の中州干潟を調査するのは二年ぶり。中州の面積は干潮時で最大約八十㌶。この時期は一年のうちで最も生物の活動が活発になっているという。

メンバーらは泥の中に足をズブズブと踏み入れながら、巻き貝やカニ類を採集。全国的に数の少ないルイスハンミョウやハクセンシオマネキなども多数生息していることを確認した。

中州干潟周辺では現在、東環状大橋（仮称）の架橋や沖洲海浜の埋め立てといった開発計画が進められている。このため同会は「干潟の環境が開発の影響を受けるかどうか、今後も定期的に調査を続けていきたい」としている。

朝日新聞　2000.7.30

徳島新聞　2001.6.10

干潟の魅力を絵本でも紹介した干潟のビデオ上映とお話し会＝県総合福祉センター

干潟の魅力 子らに紹介

市民グループがビデオ上映

徳島市

吉野川河口干潟の環境を考える市民グループ・吉野川ひがた事務所（大久保多加代、村田佳代子世話人）は九日、徳島市内の県総合福祉センターで干潟の魅力を知ってもらうビデオ上映とお話し会を開いた。

会員や家族連れら十六人が出席。諫早湾（長崎）や藤前干潟（愛知）などに見られる多くの生き物を誕生させてきた湿地の役割のほか、吉野川干潟で暮らす数種類のカニをビデオで紹介。絵本で子供向けに干潟の話をした後、干潟の浄化作用に関するクイズなどもして、干潟への知識と関心を深めた。

年に三、四回は吉野川干潟を訪れるという同市中昭和町二の獣医、バルネケ・マミさんは「よく知らなかったカニの名前が分かった。今度行ったときは家族に自慢できます」と話していた。

朝日新聞　2001.6.18

第3種郵便物認可

梅雨の晴れ間に観察会

吉野川の河口付近

干潟の生物を観察する子どもたち

梅雨の中休みの好天に恵まれた17日、吉野川河口付近で、干潟の生物や海岸の海浜植物を観察する催しがそれぞれ開かれた。参加者らは多彩な動植物を楽しむとともに、環境を守る大切さなどを学んだ。

干潟ではカニやハゼ

河口近くの干潟では、親子連れなど約80人が参加して「吉野川干潟ラリー2001」が開かれた。

日本自然保護協会が各地で開く「2001年全国一斉かんさつ会」の一つで、同協会ととくしま自然観察の会が、家族などで干潟を観察する際の日時の選び方や服装、観察のコツを知ってもらおうと企画した。

参加者は、干潟の生き物がすむ場所に立てられた旗を目印に移動し、しゃがみ込んで赤いはさみのシオマネキや、踊っているように動くチゴガニなどを珍しそうに観察していた。

泥の中を跳びはねるトビハゼが近づいてくると、徳島市川内町の日下詩帆ちゃん(5)は「泥だらけだから、ハゼが詩帆を仲間だと思ったのかな」と目を輝かせていた。

とくしま自然観察の会 会員募集

自然のつながりを感じて、しくみを知って、小さな生命のぬくもりを誰かに伝えたい。
「自然」だけじゃなく「ひと」も大好きな人々が知恵を出し合って、自然と人とのかかわりを見つめなおしてみようよ!

とくしま自然観察の会に入会すると

1.会報「しおまねき通信」(隔月発行)が送られます。
2.とくしま自然観察の会が主催するイベントのお知らせ、お誘い等を致します。
3.吉野川の干潟や自然観察会の生情報をお届けします。

●会費(4月～翌年3月)
★2,000円(半期 1,000円)

高校生以下はジュニア会員へ

頭で考えるよりは、自然の中で、風と一緒にドキドキ、わくわくする気持ちを体いっぱいで感じてほしい。まずは吉野川の干潟という素敵な探検場所から出発!!
▼ジュニア会員になると
1.吉野川ひがた探検隊に入ることができる。
2.探検隊の会報が送られる。(年2回)
3.探検隊の行事のお知らせ、お誘いをするよ!
(探検隊の生情報もお届けします)

●会費(4月～翌年3月)
★小中学生・高校生=1,000円 (半期 500円)

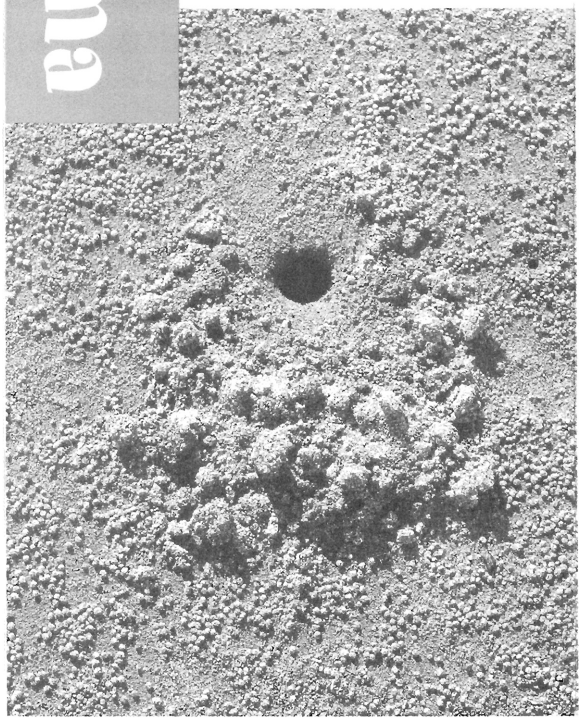
とくしま自然観察の会
http://www.shiomaneki.net/
【連絡先】〒770-0944徳島市南昭和町4丁目70-3-301
井口利枝子方 Tel & Fax=088-623-6783 e-mail=office@shiomaneki.net

★会費、カンパは下記へ郵便振込をお願い致します。
郵便振替口座:01610―8―7838 口座名:とくしま自然観察の会

★このリーフレットは、TaKaRaハーモニストファンドの助成をうけて作成しました。

Tokushima

とくしま
自然観察
の会



とくしま自然観察の会　リーフレット